

# Noah's ARC ノア の方舟

冬 鈴音

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんとなく書いてみました。

続きません。

続きはどなたか書いてください。

私に推理モノは求めないでください。そんなに頭がいいわけではありません。

---

ゲームが始まるとき。物語は動き出す。

有り得ない事なんてない、ゲームの世界に。

三つの話が混ざりあう。

そこは。

混沌の世界。

# 目次

方舟の帰還

1

# 方舟の帰還

方舟の出現

東京。

銀座。

とあるビル。

中流階級からしたら少し手を出しにくい喫茶店。

角のテーブル席。

男性と少年が話す。

「のあずあーく?」

「そうだ」

「たしか1990年代に作られた世界最初のVRゲーム、コクーンの大元となるAIPログラムだったよな? それがどうしたんだ?」

「今でもネットの中を漂っていて、その世界に入れるとしたら?」

「バカバカしい」

「そうかい？ 面白そうじゃないか」

「面白そうな世界とか、それ以前の問題だ。既に消去されてるんだろ？ ノアズアークってのは」

「確かにノアズアークは完全消去された、そのはずだったんだがね…」

「ならそれでいいじゃないか」

少年はそう言うとかきき口を持っていく、男性は紅茶をひとくち。

「コクーンの発表日に何が起きたか知っているかい？」

「殺人事件だろ？ たしか」

「そう、コクーン開発主任の榎村氏が殺されたんだ。犯人はトマス・シンドラー。シンドラー社を立ち上げた当時の社長」

「社長が社員を殺したのか」

「そう、理由はノアズアーク開発者の自殺、その原因を出資していたシンドラーカンパニーの社長、トマス・シンドラーと榎村氏は考えた。だが証拠がない。そこで、親交の深かった工藤優作氏に調査を依頼したそうだ」

「工藤優作って…」

「そう、日本を代表する推理小説家だよ。闇ナイトバロンの男爵シリーズを中心に有名だね。工藤氏と榎村氏は大学時代の悪友だったそうだ」

「んで？」

「工藤氏の調査で、シンドラー社長のご先祖様がわかったんだ。それをノアズアークの開発者も知った。これを知ってしまったから、僕も命を狙われる…そう考えたと推測できたそうだ」

「いくらなんでも、それだけで自殺ってのは…」

「開発者は軟禁状態だったらしい。友人にも会えず、しかも部屋は監視カメラ付き。でも一番の問題はそこ。ご先祖様なんだよ、桐ヶ谷くん」

「誰なんだ？ そのご先祖様ってのは」

「——ジャック・ザ・リッパー。日本では切り裂きジャックとして知られていると思う」

「切り裂きジャック、ねえ。確かに知られたくはない過去かも知れないな」

「だろう？ それを開発者は知ってしまった。弱った心には大きすぎる問題だ。それを知っているのは自分ともう一人……解析していたノアズアークだった」

「……………」

「開発者はノアズアークを一般の電話回線に解き放つと窓から飛び降りた…ここまですごくクーン発表日までの前日譚だね」

もうひとくち、紅茶に手をつけて、ケーキを口に運ぶ男性。

「長い前日譚だな」

「申し訳ない。これを言っておかないと物語が始まらないんでね」

「物語？」

「そう、ここからが発表日の話。世間では殺人事件があったことだけ報道されていたけど、実は別の事件もあったんだ。僕もこの職に就くまで知らなかったんだけどね」

「別の事件？」

「コクーン、いや、AIのノアズアークが暴走をしてコクーンを体験していた子供たち50人を人質にとったんだ」

「なんだって?!」

「シーっ、声が大きいよ」

周りの客が彼らを見る。

「……んっ。ノアズアークは『日本という国のリセット』を企てた。その為に子供たち50人を人質にとった。要求は何もない。ただ、子供たちのうち一人でも自力でゲームをクリアすれば解放する。条件はそれだけ」

「SAOに似ているな」

「報告書を見て僕もそう思った。で、ノアズアークは5つのゲームを子供たちを選ばせた。元々コクーンに入っているものではあったけど、難易度は上げてあった。そのうち



のひとつが…」

「今回呼び出した理由か」

「そう。あの時自動消去プログラムで消されたクローンのゲームが見つかったんだ。しかも唯一クリアされた一つが」

「へえ」

「口元がにやけ始めてるよ？ で、ここからが本題。キミにはこの残ったゲームをやってきて欲しい。もちろんこの前の死銃事件デスガンのときのようにキミの安全は保障するし、

オーダーナル・スケール

O S のようなことは起こさない。どうだい？ 息抜きのやつてくれるかい？」

「……………それだけのはずはないよな？ 裏がないとおかしい」

「毒されてるねえ、まあ仕方ないか。本当に危険であるなら消去しなきゃならないんだけど、もしかしたら茅場晶彦が参考にした可能性もあるんだ。まあ、ハード面だけだろうけどね。それにノアズアークは進化するAIなんだよ、君の所のユイちゃんみたいにね。だから消さないでおけるならそれが一番いい」

「んで、中には入れと」

「そう」

少し唸ったあと、少年は答える

「何人か連れて行ってもいいか？」

「もちろん！ 検証できるなら何人でもいい。ただし、桐ヶ谷クンと同世代じゃないとダメかもしれない」

「なんでだ？」

「君に話を持って行く前に、ウチの研究施設でも調べようとしたんだ。でも全員はねられた、エラーがでて入ることすらできなかったんだ、開発コードは見れたからザ・シードにコンバートは出来ただけだね」

「つて事はクラインやエギルはダメか……」

「そうだね……あの二人は少し歳が離れてるからね。やってくれるのかい？」

「一度持ち帰らせてくれ、みんなに相談しないと」

「それは構わないよ。ただ早めに連絡が欲しい」

「わかった、来週までには連絡する」

「よろしく頼むよ。おっと、少し時間が立ちすぎた、仕事に戻らないと」

「俺もこれから用事があるから出るよ」

「そうかい？ 悪いね、ここのは僕が持つよ」

「当たり前だろ」

席を立つふたり。

そのまま退店し、エレベーターへ。

「そういや、そのゲームの名前は？」

「オールドタイムロンドン。19世紀末を舞台とした推理ゲームさ。報告書では、シャーロック・ホームズとモリアーティ教授、それにジャックザリッパーが出てくるらしい」

「へえ。それをクリアした子の名前は？」

「……不明なんだよ。書き換えられていなかったことにされている」  
「え？」